
ゼロ魔の催眠術師

17インチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔の催眠術師

【Nコード】

N4225Y

【作者名】

17インチ

【あらすじ】

エロゲ界の風雲児と呼ばれた一人の天才がいた。彼が世に残した一つの催眠物エロゲに世界は熱狂した。日本はただ彼という天才を産みだすために存在したのだと理解した。しかし、それを理解したときには既に天才は死んでいた。これはそんな数奇な運命を背負わされた彼の死後にあった実話をもとにした物語。今これよりゼロの使い魔の世界は催眠の闇に染まる……

第0話 エロゲ界の風雲児、神に至る（前書き）

とりあえず、今日は2011年11月11日ということでもなんか投稿したいと思い投稿しました。

外道主人公じゃなきゃ出来ないことをこの作品でやっていければいいなと思つてます。

第0話 エロゲ界の風雲児、神に至る

目が覚めると目の前に巨大な足の指があった。もちろん足の指があるということはその上には体があり顔があるわけで

僕は顔を上げていくと見上げても見上げて顔が見えてこない。間違いなくこの人間みたいなのは100メートル以上の全長を持っているようだ。いろんな意味ですごい存在感だな

「すいませーん！」

どこに耳があるかわからないが届け僕の声

「きこえているよ。そして私が神だ」

このでかい人間は神様でした。文字通り雲の上のような人だな。でかすぎ

「なるほど、流石神様ですね。存在感ははんぱないです。それでその神様が僕になんのようにでしょうか？」

「わたしを目の前にしてその冷静さ、やはり素質があるようだね。君の質問に答えるなら死んでしまった君にお願いがあるんだ」

「死んだ……お尻」

死ぬ直前の映像がフラッシュバックする。それはまさにお尻としか言いようがなかった

「思い出したようだね。そう、駅のホームに並んでいた君はなにを思ったのか突然目の前にいた女子高生のパンツを脱がし指をお尻の穴に挿入した」

思い出したぞ！そのあと僕はその女子高生に線路につき落とされて電車にひかれたんだ。あれは死ぬかと思ったが本当に死んでしまったようだ。しかし、その女子高生を恨むのは筋違いというものだろう。自分の非を認められる、そんなところも僕の持ち味に違いない

「ふふふ、あの死に際は私たち神の間でも大好評だったよ。流石は”エロゲ界の風雲児”と呼ばれた人物だ」

「そうですね。家族にはよく迷惑をかけましたが一生遊んで暮らせ

るだけのお金は残せたと思います。それだけはよかった」

いままで余り認められていなかった催眠というジャンルをエロゲの題材にして一時代を築いたのが僕である。たしか当時よく売れていたFateというゲームの3000倍程売れたんだっただか。

そして次回作を妄想していたとき思わず女子高生に手が出てしまったのだ。あれは不可抗力だった

「それだけなら君がここに来ることは無かっただろう。しかし、君が死んだ後に世界は君を中心に回りだしたといってもいい」

「え？」

どういうことだ

「君の作ったエロゲによって世界は大催眠時代をむかえたのさ」

な、なにをいってるんだ。大海賊時代みたいなこというなよ

「まず、大人気の君のゲームが漫画化するのは時間の問題だった。君は好きな漫画家に一人の名前を挙げていたね？」

ま、まさか！？

「そう、矢吹神によって少年漫画雑誌で連載され始めたのを皮切りに小説化、映画化とされ世界に発信されていった。もちろん催眠物の薄い本も大量に作られたさ、みんな君に続けとね」

ちよつと待ってくれ。僕が作ったエロゲはストーリーよりエロ重視だったはず。そんなものが少年漫画雑誌に記載されていいはずがない。

「総理や都知事、政治家たちも君のエロゲに夢中だったのさ。もう少し先の話だが小学校でそのエロゲをプレイして理解する催眠学というものが必修となった」

なんだってえええええ！！なんとという黄金時代。なぜだ！！なぜ僕はその時代にいないんだ！！何の未練もないと思ったが今僕は涙をボロボロとこぼし悔しがるのをやめられない

「世界中が今まで目も向けなかった催眠の研究にのりだし、そしてある団体の開発した催眠装置により人の脳は大幅に進化を遂げたの

だ。人工的な完全記憶能力や身体能力の向上。超能力の発現。まさに世界は君のエロゲによって進化したのだよ」

「……言葉もでないとはこのことだ。一つのエロゲでまさかここまで世界が変わってしまうとは誰が予想できただろうか」

「その催眠装置を開発した団体は君を崇拜していた。人類の進化の始まりを作った君は時代とともに世界中から神のように崇拜されるようになった」

次の言葉が僕のこれからを決定づけた

「そして君は神になってしまった」

ん？ここは笑うとこかな

「神に？」

「そう、催眠を司るエロ神に」

おいっ!?

「私の仲間たちもみんな君を迎えるのに賛成だったよ。最初は反対していた女神たちも例のエロゲの内容を理解したらすぐ賛成していたしね。これは本当にすごいことなんだよ」

僕は新世界の神になるようだ。

「しかし、神になるには条件というものがある。人の神格化はそう簡単なことではないのだが君の場合一つ以外はほとんど条件をクリアしている」

「その一つとは?」

「催眠を司るエロ神なのに催眠を使って女性にエロいことを実際にした経験がないことだ」

「.....」

い、いいかえせねえ。妄想だけでは神には至れないということか。
世知辛いな

「しかし、君が神になるのは決定事項なんだ。だから、こちらで用意した世界で催眠を使いエツチなことをして欲しい。最初にいった私からのお願いとはこのことなのだ」

「つまり神になりかけの僕に異世界で催眠修行を積みとということです
すね」

「まあ、そういうことだな。君のエロゲのファンは私はもちろん、他にも多くの神達がいる」

ふむふむ、絶対みんな知らないだけで催眠ってムチャクチャエロい
と思うんだ。神のお墨付きだし

「君ほどの信仰を集めているのは私たち神の中でも数えるほどしかない。信仰の多さからいって異世界にいつてもできないことの方が少ないだろう。なんたって君には神の中でも上位の力をすでに持っているんだからね」

「なんでもって、催眠術を使ってエッチなことはできますか？」

「当然だよ。催眠に限らず君は万物を操れるだろうさ。神の力とは万能なんだ」

まさか神様公認で催眠術を使ってあんなことやこんなことができる日がこようとは

「それで用意してくれた世界とはどんな世界ですか？」

「魔法があり王族や貴族がいる。ライトノベルのゼロの使い魔に酷似している世界だ」

なんてこった……。ティファニアやカトレア、キュルケのような巨乳勢にルイズやタバサ、カリンのような貧乳勢も取り揃えた最高の舞台ではないか！

ハーレムを作ってよし、内政チートしてもよし、俺Tueeして
もよし、自由度が高く二次創作でも人気の世界

「催眠チート……。なんていい響きなんだ。しかも、神の力を得た僕は万物を操ることができる」

「君はその力で何を為す」

目の前の神の問いかけ。威厳溢れる声、嘘は許されない。そして、その問いかけの答えは決まっていた

「僕は美女や美少女を操り、人としての尊厳を踏みにじり、心を弄び、世界を思うがままに操ることをここに宣言する！」

僕もまた神に相応しき傍若無人さを示す。その答えに目の前の神は満足げに頷いたような気がした

異世界で催眠を司る神の雛型が産声をあげた瞬間だった

第0話 エロゲ界の風雲児、神に至る（後書き）

なんじゃこりゃww

最低系のチートやハーレム要素に加え、女性の心を操るのに快感を覚える外道主人公

誰得かというと俺得です。読者層が極限まで絞られる気がする。今話題のキャラメルコーンの同人誌の方が需要がありそうだww

それでは次回からゼロの使い魔の世界の予定です

第1話 こんにちは異世界(前書き)

感想を読んだんですが、ノクターン移動すべきって人が多すぎww
ちょっと待ってくれ。まだエロいシーン一つも書いてないのにこの
扱いはいいたい・・・

一つ言わせて下さい。『まだ慌てるようなエロさじゃない』と

第1話 こんにちは異世界

あの神との語らいから5年の月日が流れた。異世界生活は赤ちゃんから始まったので童心にかえってぐーたらしてたら、何の不信感も持たれずに子供時代は過ぎ去ってしまった

なんとというか手のかからない幼児だったに違いない。その分これからはっちゃんけるつもりだけどな

では、少しこの世界での僕の自己紹介をしようと思う。名前は『ハウア・ド・ローゼンバーク』。ローゼンバーク家の次男であり父は侯爵、トリステイン国の貴族だ

家族構成は両親と兄が一人、そして自分の四人家族だ。貴族なだけあり大きな屋敷を維持するためのメイドや執事も結構な数いるわけだが

うん、まあそんなのどうでもいいことだろう。自己紹介を続けよう。僕は今年5才となり初めて魔法の杖を握った。属性は『風』と『水』、タバサとお揃いだ。

もちろん杖を握ったばかりの僕は魔法使いとしては最低ランクのドットクラス。自分のステータスを見たので間違いない

ステータスとは、RPGにでてくるようなやつだと思ってくれて構わない。名前や攻撃力や魔法の系統などそのとき見たいと思ったものが自然と頭に流れ込んでくるのだ

そして、そのステータスを見抜き『操る』術を知っている僕にとっ
ていつでも全属性最高のスクウェアクラスに出来るしあまりそこら
へんにこだわる気はない

生まれたばかりの時に自分のステータスを弄ったのはいい思い出だ。

物理防御：3 1000000

特殊防御：2 1000000

といった感じだ。

一般的な成人男性が大体両方とも15くらいなのでかなりの頑丈さを手に入れている。

例えるならスカイツリーの頂上から放り出されてもかすり傷一つつかない位の防御力だ。

赤ん坊の時って何が死に繋がるかわからないからね。これくらいは必要なのである。

屋敷の中にほとんどいたので今まで危険らしい危険に遭遇したためではないけどな。貴族で次男坊ということで大切に育てられているのだ

今座っている『椅子』一つとっても心地よい弾力のある最高級のもの。柔らかいそれを撫で回していると部屋に誰かが入ってくる

「ハウア準備はできたか？」

入ってきたのは小綺麗なメタボ男。まあ、父親なのだけど

「はい、父上。今日は僕専用の奴隷を買って頂けるということで楽しみにしていました」

そうなのである。5歳の誕生日プレゼントに奴隷を買ってくれるそうなのだ。マジで嬉しい、絶対美少女の奴隷をゲットしてみせるぜ

僕の父親は領地を経営する才能はあるが平民を労働する奴隷のようにはか思っていない典型的な貴族だ。趣味は奴隷を買って好き勝手に扱うこと。

調教部屋とかあるし、本当にいい趣味してるよ

「そうかそうか、お前の兄、ロイは奴隷などいらんといっておるがいくらでも金で替えがきく奴隷程使い勝手のいいものもないのだがな」

全くである。兄さんは顔は父親似でありよくないが、なんと

か・・・いい奴なのである。正義感が強く真つ直ぐな感じだ

「そうですね。まあ、兄さんには兄さんの思うところがあるのでしよう。行きましよう父上。どんな奴隷がいるのか今から楽しみですよ」

母親に似ている整った顔立ちで無邪気に笑い。金色に輝く髪を揺らしながら父上と出かける

部屋には四つん這いになりながら顔を幸せそうに上気させた一人のメイドだけが残された。数週間前まで村一番の美女と言われていたが、主人のハウアに座られることを至高の喜びへと『変えられて』しまった世界一幸せな椅子の姿だった

第1話 こんにちは異世界（後書き）

夜天の書が世界一幸せな魔導書ならこのメイドは世界一幸せな椅子です。

次回フリーター奴隷を買う

少し違いますがww

第2話 奴隸市場での出会い（前書き）

今回はある理由で主人公がいい奴っぽいけど多分今回だけですww

第2話 奴隷市場での出会い

馬車に揺られること数時間。領内にあるトリステインの中でも有数の奴隷市場に到着する。流石は領主公認ということもあって規模も大きい。そして、にこやかな表情をした三十代後半位の男が僕らを出迎える

「これはこれは領主様。お待ちしておりました。こちらは御子息様ですか？いやいや、領主様に似て聡明そうでいらっしゃる」

父上に似てるとかあんま嬉しくねーぞ。性格は似てるかもしれんが

「アラン、挨拶はいい。今日は息子の奴隷を買いに来た。裏に案内してくれ」

「かしこまりました。領主様がいらっしゃるといふことであらゆる奴隷を用意させて頂きました、必ずやお気に召す奴隷がいることでしょう」

営業用の笑みを絶やすことなく案内するアランという奴隷商人。裏

というのはオークションに出される前の奴隷たちがいる場所らしい。まさに、VIPだけが許される場所である

建物の裏口のような所に入り案内されたそこには大量の檻や首輪をした人間たちが存在していた。中には人間ではない亜人とよばれる羽が生えた人間や獣の耳を生やした獣人のような奴隷までいる。流石にエルフはいないようだな

所狭しと並んでいる檻の間を歩きながら、あれは力が強くて力仕事に適しているだとかこれは没落貴族のラインメイズで護衛にピツタリだとか説明していくアラン

僕も奴隷達のステータスを見ながら使えそうな奴隷を見定めていく

「ふむ、どうだハウア。気に入った奴隷はいたか？」

そう尋ねてくる父上。いないことはないのだが、これだ！っていう
奴隷がまだいないのだ

うーむと悩みながら周りを見回す。どいつもこいつも死んだような
目をしやがって。もう少し面白そうな奴はいないもんか

「……………あれは」

そんな中、隅の方に目立たないように置かれている檻を見つけた。
僕はその檻の方に近づいていく。何か掘り出し物の予感がしたのだ。

そして、そこには一人の少女が入れられていた。少女といっても歳
は僕より上で十代前半といったところか。ぼろ布を纏い紫色の長い
髪を背中におろしている。首輪を嵌められ手首に手錠をされている。
それだけなら他の奴隷とあまり変わらなかっただろう。しかし、他
の奴隷達と大きく違う場所があった。

それは

病的なまでに嚴重に

何重にもされた

目隠し

包帯のようなものでぐるぐる巻きにされているその上に鍵のついた皮製の目隠しで覆われている。まるで貞操帯のように決して解放されることのないように

「じゃあ？」

僕は奴隷商人に尋ねると言いにくそうにしながらも告げた

「その娘は……呪い持ちに御座います」

呪いもち？なんだそれは。興味を持った僕は少女のステータスをみる

そこには今まで見たことのない項目があった。

特殊体質：キュベレイ《石化の魔眼》

その呪いを目に宿した少女は名を『メデューサ』。女神アテナの怒りを買って醜い化け物へとその姿を変えられてしまった。その上ペルセウスに討ち取られ首をアイギスの盾へと嵌め込まれた救いのない女性

本人ではないだろう。しかし、何かに耐えるようにうずくまる少女は何かを必死に抑えつけていた。

その自分の存在に怯えながら。先の見えない責め苦に耐え抜いてきた彼女は弱っていても力強く美しい、そしてそんな少女を欲しいと僕は思った

『眠れ』

念じる。この星に存在するすべての意識を奪う。例外である僕と一人の少女を除いて。その場に崩れ落ちる父上や奴隷商人を気にせず自己紹介する

「初めまして、僕の名前はハウア・ド・ローゼンバーグ。世界中のみんなには眠ってもらってるから今君を知覚できるのは僕だけだ。安心してその力を解き放つといい」

耳が痛いほどの静寂。まるで世界に僕と少女の二人しかいなくなってしまったかのような世界

「……ほ……んど?」

「本当だよ」

しばらく戸惑った後に解放された力。僕の体を襲う力は間違いなく石化の呪い。この石化に耐えられる者はそういないだろう。本来あんな布の目隠しなどで遮れるようなものではないのだ。だからこそ彼女は必死に制御できない魔眼の力を抑えつけていた。ほとんど自分が身動き出来ない程に神経をすり減らしながら

この少女は本当に強い。僕はこれから催眠の力を使い人道的に反するあらゆる非道を行っていくだろう。異常に染まっていく世界で自分は正気を保ち精神的に孤立するだろう。そんな僕と正気を保ち共に歩んでくれる心強い存在を探してたんだ

檻についている錠を手で握りつぶし無理やり扉をこじ開ける

檻の中でしゃがみ込んでいる少女の手を掴んで外に連れ出す。この世界の神が彼女を見捨てたというなら僕が救おう。手を伸ばしその目を覆う戒めを解き放つ

「やっぱり、僕好みの美少女だ」

思わず笑みがこぼれる。目隠しなんて勿体無い、薄紫色の二つの瞳をこちらに向けていた。僕より頭二つ分位背が高いから見下ろされてはいるが

普通はない瞳の中心にある赤い正方形が爛々と異彩を放っているのは魔眼である証拠。僕はそんな特別をとっても愛しているのだ

「本当に、何ともないのですか？」

「こんな素敵な目を見たのは初めてだよ。僕が……、僕だけが目を合わせることもできる特別な目だ」

そんなことを言われたのは初めてだったのだろう。どのような反応をすればいいのかわからない様子だ

「今日は僕の世話をしてくれるメイドさんを探しにきたんだ。是非僕の専属メイドになってくれ」

「でもこの目では・・・」

僕は目の前の檻の柵を一本拝借。それに杖を向け鍊金して細いフレームの眼鏡に形を変え、その何の変哲のない眼鏡のステータスを操り『魔眼殺し』の効果を付与して少女に差し出す

「はい」

「これは？」

「その力を封印する眼鏡。その眼鏡をかけている限り魔眼は発動しない」

「これを私に頂けるのですか？」

「うん、君は可愛いから眼鏡も似合うさ。さあ、かけてみて」

「は、はい」

躊躇いながらもその眼鏡をかける少女。少しあたりを見回した後にこちらをみる。眼鏡越しの目には特殊な赤い正方形はなく普通の薄紫色の瞳だけ。

「はい、つけたー！それつけたら僕のメイドにならなきゃ駄目だからな。一生逃げられないし、エッチな命令もじゃんじゃんしちゃうから！」

僕の態度が豹変したことに驚き目を見開く彼女

「だから、その綺麗な目も僕のものだ。僕の物をバカにするのは許さない。例えば君でもだ」

両腕を背中に回し抱き寄せ力強く命令する。上目遣いで格好がつかないのが悔やまれる

「こんなわがままな僕だけど付いてきてくれないか？」

正気を保った唯一のパートナーになるかもしれない少女にお願いする。彼女は涙を零しながらもしっかりこちらを見つめた後に深く頷いてくれた

「私の名はメデューサと申します。この身も心も全てはハウア様の為。どうか末永く可愛がってくださいね」

深くお辞儀をした後に眼鏡をかけた可愛らしい笑顔を僕に向けてくれた

さてさて、父上と奴隷商人の頭の中を操ってメデューサが呪い持ちであることを忘れさせて、何の滞りもなく奴隷契約がなされたように認識させる

ついでに父上にはメデューサに変な気が起きないようにしておかな

いとな

「ハウア様？」

聞いた話だとメデューサは今12歳らしい。僕は5歳なので結構年上なのだが愛情に飢えていたのかずっと後ろから抱きしめられている。まだ小さい胸が後頭部にあたってドキドキである

「メデューサが可愛すぎるから父上が手を出さないようにしてるんだ。人の意思を操るのが僕の得意分野だからね」

「あ、ありがとうございます。でも凄いですね、人の頭の中を好きに操る力。それに本当にみんな眠ってしまっていますし」

「いまだに世界は眠りについてるのだ。見渡せば奴隷たちも檻の中で眠っている」

「神の如き力をもった神見習いといったところかな。操るといつ分野

においての神様。修行といっても遊びにきたようなものだからさ、好き勝手生きていこうと思ってる」

僕は一つの誓いをたてる

「善も悪もない。ただこの力でエッチなことするんだ！」

「……私はずっとあなたのお側に」

そう言いながら、ギュッと僕を抱きしめるメデューサ

「いやいや、嬉しいけどさ。そんなシリアスなところじゃないから」

呆れながら上を見上げると笑っているメデューサがいた。うん、可愛いくて大変よろしい

「じゃあ、帰るかいね。』目を覚ませ』」

ようやく世界の眠りをとく。誰も眠っていたことを不審に思わないように認識を操りながら

「・・・む、その娘でよいのかハウア？」

目を覚ました父上は気絶していたことを何も不審に思っていないようだ。

「はい、父上。この娘を気に入りました」

「そうか。アラン、代金はいつも通り家の者に持って来させよう」

父上はアランの用意していた契約書にサインする。これでメデューサは僕のメイドさんになったわけだ

メデューサと手をつなぎながら馬車に向かう。さて、また数時間馬車に揺られることになるが来るときと違って隣りに美少女がいればあつという間に違いはない

後に知った話だが、僕が世界中を眠りにつかせたことで、アルピオンで上空を飛んでいた竜騎士が大量に転落死したらしい。空飛ぶ生き物を取り物にするとか酷い奴らもいたもんだ。これを機会に生き物を大切に扱ってくれることを切に願うよww

第2話 奴隷市場での出会い（後書き）

メデューサは主人公の従者でありパートナー的なポジションです。
だから対応も優しいww

原作キャラは基本催眠でやられちゃうので、まともな視点から意見
が欲しくて他作品キャラを一人使わせて貰いました。

あと原作以外のキャラが出るとしたら使い魔召喚の時位だと思われ
ます。多分・・・

次回はやっと催眠エロができそうでした。自分はヴァリエ
ールあたりが危ないと思いますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4225y/>

ゼロ魔の催眠術師

2011年11月13日18時47分発行